
永久の命

樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久の命

【Nコード】

N8724Q

【作者名】

樹

【あらすじ】

時代は平成。平凡生活まっしぐらだった主人公。だが、ある日突然世界が変わった

大きな地震の後に起こった突然変異。植物は急に伸び始め、獣は急に凶暴化し始めたのだ

突然の変異に戸惑う主人公。とりあえず生きようと行動する

ドキドキファンタジー！シリアスあり、ラブあり、多分コメディーも？

突っ込んだら負けな部分も出てきますが流してください。楽しんでいただけると嬉しいです

序章 始まり

僅かな光源だけが頼りの、暗い暗い石で出来た部屋。そこで白衣を着た男性が1人。彼は様々な実験器具を操り、紙に何かを走り書きする。専門用語と数式、記号の羅列だ。

時折、考え込むように止まっていた手は、ピタリと、完全に止まった。始終無表情だったその顔には仄かに笑みを灯らせる。

「完成だ…」

男は精密機械を操り、部屋の隅に置かれた水槽を見る。円柱型の水槽の中には薄い緑色の液体が満たされていた。その中には、赤黒い塊が漂っている。

「これで私の願望が叶う。世界の穢れを取り除ける…人間という、

穢れを」

男は、冷酷な笑みを浮かべた。

第1章 主人公は平凡な少女

「ギャーーーーー！！遅刻ーーーーー！！！」

ある一軒家に少女の悲鳴が響いた。ドタドタと慌ただしく階段を駆け下り、支度を始める。

「何で起こしてくれなかったの!？」

母に文句を言うと、ちゃんと起こしたわよ、という返事が来た。だが構っている余裕はない。彼女は腰まである髪を括り、鞆をひっ掴む。

“昨日、○×氏が幼児虐待の容疑で捕まりました”

「げ、またこういうニュース…」

不意にＴＶに目を向け、顔をしかめて呟いた。それに新聞を読んでいた父が振り返る。

「もう３５分だぞ」

「遅刻ーーーー！！行ってきます！！」

『いつてらっしやい』

叫びながら家を飛び出した。

彼女の名前は柴咲^{シバサキヒサギ}楸。中学一年生だ。夏服に代わったばかりのセーラー服をはためかせ、四方八方に跳ねる、馬の尻尾とよくからかわれる髪を揺らして駆け抜ける。

顔は父親似。運動神経は中の中。小一から剣道を習っている。成績は…興味のある分野の記憶力はいいのだが如何せん、勉強嫌いだ。ただ読書家なので漢字の読みは得意。書きは聞くな。

因みに、山登りや沢登を家族でしにいたりキャンプをしたりと、家族揃ってアウトドア派だ。山中の悪い道などものともせず走る。

背はクラスでも前の方。150?あるのだが最近の子はデカい。体重は50?弱。自分より背の高い子に体重で勝って少しへこんでいた。

まあ、彼女のプロフィールはだいたいこんなものだろう。

今の時代は平成。色々便利な物が出回り、風邪で人が病死するなど滅多にない時代だ。だが、それに比例してよくない話も増えている。

他国では酷くなる戦争、広がる貧富の差。

国内では犯罪の数々。

戦争で人が死ぬのならばよくないがまだ理解できる。殺らなければ殺られるからだ。争うなと思うが人は常に争いたがる生き物だ。性

には逆らえないだろう。

だが、戦場にいる人達は命が何なのかよく知っている。

それに反して、国内の犯罪はどうだろうか

死にたかったから

興味本位

死刑になりたかったから

ムカついたから

死んでも生き返ると思ったから

死が身近でなくなった途端、人は面白半分に死を遊ぶ。

現実と非現実の区別もつかない。

育てる気もないのに子を産む。

そこにある1つの命が何なのか知ろうともしない愚か者共が増えた。

楸は極普通の一般家庭に生まれた子供だ。親に愛され、叱られ、褒められ、時に諭され。

金持ちではないが、そういう恵まれた環境で育った普通の娘。

他の子供なら

「親がうざい」

「いなくなればいいのに」

「金持ちの家に産まれた
かったー!!」

そんな文句を零す年頃だが、彼女は1度もそんな事を口にしたこと
はない。

確かに親は口うるさい。ムカつく時だってある。お金が欲しい時も
あった。けれども、ニュースを見て思うのだ。

「幸せだな」

と。毎日の生活には退屈していた。だが家族や友達がいればそれでいい。特に努力しようとも思わない。

彼女はとても淡泊で欲の薄い子供だった。

ニュースを見て腹を立てても、本を読んで涙を流しても。すぐにその感情は薄れゆく。

ただ、自己嫌悪に対しては発作的に蘇ってくる。

そして、彼女はニュースを通して世の中の汚さを知り、世界を嫌悪していた。命を遊ぶ奴らを軽蔑していた。

柴咲楸は、そんな子供だった。

第2章 物語は始まったばかり

楸は机に突っ伏していた。今日はギリギリセーフで鐘が鳴ると同時に教室に滑り込んだのだ。

「つつかれた」

「クスクス、今日もギリギリだったね、ヒサちゃん」

「笑うなコバちゃん」

楸に声をかけたのはなかなか可愛い女の子。空渠小鳩。さらっさらな髪はちよつと羨ましい。勉強と運動がそこそこできて性格もいい子だ。

（何で誰とも付き合っていないのか疑問）

楸はそんなことを考えながら体を起こした。

「次の時間何だっけ」

「理科だよ」

「やった！寝れる！！」

「ちゃんと聞こうよ」

別の意味で喜ぶ楸に、小鳩は苦笑を浮かべた。移動教室なので教科書を持って2人は教室を出ようとした。その時

「きゃあ！」

「うおっ！」

地面が揺れた。何の前触れもなく、かなり大きく。

「地震だ!!」

誰かが叫んだ。生徒達は悲鳴を上げて出口に突進した。

「どけっ！」

先頭を切っていた男子に突き飛ばされ、小鳩よりも先に出ていた楸は小鳩の下敷きにされた。頭を強かに打ちつけ、フツと気を失う。

「ヒサちゃん！」

踏み潰されそうになり、慌てて彼女の体を引いて端に寄る。他のクラスから生徒が押し問答を始め、ここにも同じだと悟った小

鳩は下の小窓を開けて教室の中に入って楸の体を抱き締めた。

恐怖をやり過ぎすように。

1時間程して、楸はようやく眼を覚ました。彼女はしばらくぼんやりしてから、ゆっくりと体を起こす。

「頭痛い…」

ポツリと呟き、辺りを見回す。カーテンを閉め切っているせいでやけに薄暗い。小鳩以外は誰もいないようだ。

「コバちゃん、どしたの？」

肩を叩くとバツと顔を上げてみってきた。今までに見たことのない、恐怖で満ちた顔に彼女は首を傾げる。小鳩はみるみるうちに眼に涙を溜めて抱きついてきた。

「ヒサちゃん！」

彼女はワアワアと声を上げて泣いた。楸は困惑の表情を浮かべながら彼女の頭を撫でた。

(こづいつ時、どうすればいいか分かんないから困る)

そんなことを考えながら、空いている手を背中に回した。

小鳩は存分に泣き、ティッシュで鼻をかんだ。楸は彼女が落ち着いたら判断して口を開く。

「大丈夫？」

「うん…ヒサちゃん、これから言うこと、全部本当だから聞いて」

「うん」

「みんなが出て行つて学校が静かになった時ね、外でいきなり悲鳴が聞こえたの」

「…うん」

「それでね。外見たら、真っ黒で、眼が赤い動物がみんなに襲い掛かってた。そしたらまた地面が揺れて、木とかが盛り上がってきて、そのせいで建物が崩れたりして下敷きになって死んじゃった子とかもいたんだ」

体を震わせながら語る小鳩に、楸は呆然として聞いていた。地面からいきなり木が生えてきたり動物がいきなり凶暴になるなど、まるで御伽噺ではないか。

唾を飲み込む音がやけに耳に響く。嘘のようだが小鳩が念を押してから嘘を吐く理由がない。口の中がカラカラに乾いている。楸はゆっくりと口を開いた。

「お…」

「お？」

「起きてなくて良かった…」

心底よかった、と表情に出して言う彼女に、小鳩は眼を見開いた。だが、その目元を和らげ、クスクスと笑い出す。

「第一声がそれなの？」

「いや、コバちゃんには悪いけどね」

そう言つて楸は机を頼りに立ち上がり、ゆっくりと窓に近づいた。カーテンを握り、深呼吸を繰り返す。覚悟を決め、勢いよく開いた。

「マジ？」

窓の外の光景に眼が離せなかった。

整備された道路も、立ち並ぶ住宅も、何もなかった。見慣れた光景など、どこにも

伸びた草木に絡めとられ、崩され、穴を空けられている。

そしてところどころにある赤い物。楸はそれらが何だかハッキリする前に顔を無理矢理背けた。1度落ち着く為に小鳩の近くに座る。

小鳩はすっかり混乱している楸が、顔を上げるのを待ってからラジオを出した。

「さっきまで流してたの。私のじゃないんだけどね…もう、流れることなんてないんだろうけど」

彼女はギュッと拳を作り、ゆっくりと語った。ラジオから流れたことを

「この植物とか動物とかは東京を中心に全国に広がったんだって。衛星で見たら世界から同じ現象が起こってる。原因は調査中、で所で途切れた」

「……………帰ろう」

「え？」

唐突な提案に、小鳩は眼を見開いた。楸は足を震わせながら立ち上がる。

「ここにいたって助けは来ないんでしょう？なら、帰ろう」

「外は、化け物がいるかもしれないんだよ？」

小鳩が言えば、楸は今にも泣きそうな顔をして笑った。

「何かしてないと、くじけそうなんだ」

「…そうだね」

2人は笑う膝を叱咤してヨロヨロと鞆を持って出た。歩いているうちに冷静さを取り戻し、しっかりとした足取りで歩く。だが

「う…」

2人は階段まで来て、足を止めた。息を呑み、楸は胸を、小鳩は口

を押さえる。

「おちたんだ…」

這い上がってくるものを飲み下すとすっぱいものが口の中で広がった。ギョツと服を握ってたえていると、小鳩は耐え切れずに崩れ落ちた。

踊り場や段差に転がる生徒の死体。どれも踏みつけられた跡があり、圧死した様子が伺える。

楸は縫い付けられたように離れない視線を無理矢理外し、ガクガクと膝を震わせながらしゃがんだ。吐く小鳩の背中をぎこちなくさする。

「何で…!!」

吐くだけ吐いた小鳩は叫んだ。何が言いたいかわかった楸は、彼女の背に額を押し付けた。

「何で！助けようとしなかったのよ！もしかしたら生きていたかも知れないのに…！」

避難訓練だつてやっていたのに、学校中がパニックになった。あれだけの人がみだ。助けようとしやがめば自分が危ない。わかっている、そんなこと。わかっているけど

「何でよ…」

言わずには、いらなかった。

2人は涙を流した。決してしらないわけではない者の死を悼んで。理由もわからず流れる涙を止められなかった。

ただ、悲しかった。

「コバちゃん、行こう」

だけれど、こんなことしている暇はなかった。楸は震えながら立ち、小鳩に手を差し伸べる。彼女はハンカチで口を拭う。2人はギュッと手を繋ぎ、死体を見ないように顔を背けて歩いた。

校舎の外も、惨かった。食い千切られた人の死体。内臓が見えているものもあり、今度は楸も吐いた。

2人は泣きながら嗚咽を漏らしながら体育館に入る。楸がここに導いたのだ。

「なん、で…ひつく…ここ、なの？」

「うえ……しな、い…グスッ…とりに…」

気休め程度かもしれないが、武器が欲しい。楸は泣きながら部室を漁り、ようやく泣き止んで自分の木刀を探り出した。木刀を紐で結って肩に引っ掛ける。両手はあいていた方がいい。

「私も」

そう言って小鳩も同じようにした。2人は1度水道で口をすすぐ。水道は壊されたようで水が噴き上がった。

この後、2人は互いに無言だった。死体から顔を背け、淡々と歩く。小鳩はまだ震えていたが、楸はしばらくすると道端に転がる死体。ただの景色になっていた。もう、何も感じない。

（ウチって非情？）

少しショックを受けた。地面は足場が悪く、小鳩は何度もひっかけていた。そこらには獣が食い散らかした後があるのに、1度も獣と会わない。

冷静ではない2人はまだそのことに疑問を持たない。

まだ残る町の面影を目印に足を進めていると、小鳩が不意に足を止めた。

「コバちゃん？」

「…子供」

彼女はポツリと呟くと、急に走り出した。楸はそれに目を見開き、あわてて追いかけた。転げながらも走る小鳩についていくと、子供の泣き声が聞こえてきた。

「あ…」

目の前の茂みを掻き分けた小鳩は息を呑む。口を押さえて顔を背け

た。後ろから顔を出した楸は眉を寄せる。

木に串刺しにされた女性に、5才くらいの少年が縋りついている。女性はまだ息があるらしく、こちらを目だけを動かして見た。何か口を動かしているのを見て、楸は唇に耳を寄せる。

「……………わかった」

楸が頷くと、女性は安堵の表情を浮かべる。楸は女性の手を取り、少年の頭に乗せる。少年の頭を押して女性の顔に顔を近づかせた。

「お母さん！」

すると、静かになりかけていた少年はまた泣き出す。女性は弱弱しく微笑み、そのまま瞼を閉じた。体から力が抜け、さらに深く突き

刺さる。

「お母さん！お母さん！！死んじやだよ！！」

ワアワアと声をあげて泣く少年を小鳩は抱きしめる。楸はジッと女性の亡骸を見、指についている指輪を抜き取った。それをポケットにつっこみ、女性の体に手を添える。一呼吸置き、グツと引き抜いた。

「おやすみなさい」

ぼそりと呟き、地面に寝かせた。少年の方を見ると、小鳩に抱きしめられたまま眠っている。

「ねえヒサちゃん、お父さんとお母さんは無事だよね？」

「
…」

不安げに聞いてくる小鳩に何も言えなかった。彼女は無言でしゃがみ、背中を見せる。小鳩はその背にグッタリとした少年を乗せた。

「早く、帰ろう」

呟くように言い、楸は歩き出した。小鳩は暗い表情でその後をついていく。

「あの女の人になんていわれたの？」

しばらく歩いていると、思い出したように聞かれた。15分とかわらない道のりがやけに長く感じた。楸は落ちてきた少年の体を上げてから答える。

「この子をお願いします、だつてさ」

「そっか」

会話が続かない。楸は、ずっと思っていたことを口にした。

「世の中には、虐待だつてする親がいるのに、死にそうになりながら子供の心配をする親もいるんだね」

死んだら、この子が気がかりだと言ったあの母親。何でああいう人

に限って死んでしまうのだろうと思った。もっと汚い奴らが死ねばいいのに、と考える自分がいた。

「いい人程早く死ぬ」

ボソツと呟き、彼女は小鳩を一瞥する。絶対に生きよう、と誓いながら。

*

第3章 残酷な現実

ようやく小鳩の家にたどり着いた。彼女は固唾をのみ、ノブを握る。

「……ヒサちゃん」

「ん？」

「手、握って」

「ん」

片手で少年を支えながら、伸ばされた手をギュッと握る。小鳩は深

呼吸を繰り返し、ゆっくりと開けた。緊張した顔はあっという間に青ざめる。

青を通り越して、白くなった。

「お父さん！お母さん！！」

出かける所だったのだろう。エプロン姿の母、スーツ姿の父。地面から伸びた蔓に絡めとられ、地面から足が浮いている。首を吊っている状態だった。

「いやああああ————！！！！！！」

小鳩は悲鳴を上げ、許容量が限界だったのだろう、そのまま倒れた。

「どろろと……」

背中にいる少年が身じろぎした。小鳩の悲鳴で目を覚ましたのかもしれない。とりあえずは少年にこんなものを見せるわけにはいかないと玄関を出た。

「んん…」

少年は少しの間は楸の背中を眺めていたが、急に暴れだした。

「お母さん！おろして！…！お母さんはどこ…？」

「ちょ…バツ………」

ジタバタと暴れる少年に、楸は落とさないようにするのが精一杯だった。だが、何だかだんだんムカついてきて、怒鳴る。

「いいかげんにしろ！泣きたいのはこっちの方だ…！」

彼女の怒声に驚き、少年は暴れるのを止めた。楸は少年を下ろし、まだ怒鳴り散らしたい衝動をグツと抑える。泣きそうな少年の手を引き、家の窓を開ける。人が1人余裕で行き来できるくらい大きな窓だ。そこに靴のまま少年を入れる。

「ソファで座って。絶対に玄関を覗いちゃだめだよ」

「…うん」

言い聞かせるように言えば、少年は涙を堪えながら頷いた。楸は泣かれなかったことに安堵して、頭を撫でると玄関に入った。気絶している小鳩の体を担ぎ、ソファに寝かせる。

「この子、見てて」

少年に頼み、台所から包丁を持って出て来た。木刀を立てかけ、椅子に絡み付いている蔦を切った。椅子を持って玄関に行き、椅子の上にさらに物を重ねてその上に乗った。小鳩の両親を締め上げてい

る太い蔓を切り始めた。

できるだけ何も考えないようにして、黙々と作業を進める。以外に丈夫な蔓は1本を切るだけで重労働だ。汗が伝い、顎から首筋へと滑る。

ようやく2人を下ろし、半ば引きずりながら庭に連れていった。冷たい体に、ゾツとする。先ほどの女性の体はまだ死んだばかりで温かった。だけれど、この人達は結構な時間が経っているらしく、冷たい。

泣きたいのをグツと堪えて、根の無さそうな場所を掘り起こす。大人2人分だ。これもかなりの重労働だった。だが、楸は1度も休まずに作業を進めた。

ようやく大きな穴が空き、楸は寄り添うように2人の体を穴に横たえる。

グツと唇を噛み締め、2人に土を被せていく。全ての土を被せて、頭の方にシャベルを刺した。

「おやすみなさい」

呟いて、家の中に入った。何か食べ物を、と勝手に冷蔵庫を探る。

電気がストップしているようなので、すぐに中のものはだめになるだろう。

「食べる？」

食べれそうな物を適当に見繕い、テーブルに広げる。聞くと少年は小さく頷いて手を伸ばした。泣いてお腹が空いたのだろう。

「名前は？」

「…セイヤ」

首からかけている財布らしき物に名前が書いてあった。空石星矢。

活発そうな男の子だが、物静かだ。おそらく母の死にショックを受けているのだろう。黙々と咀嚼している少年の頭を、何となく撫でた。すると、その顔はクシャリと歪み、泣き出した。

「お、かあ、さんは…？」

「……死んじやったんだ」

言い難そうに答えれば、星矢は彼女に飛びつき、声を上げて泣く。楸は泣きそうになりながら、ギュッと抱きしめた。

「生きなきゃ…」

ちゃんと、聞こえるように耳元で言った。

「お母さんの分まで、生きよう」

鼻の奥がツンとする。

「生き残れるくらい、強くなる」

喉までせり上がって来た熱い物を頑張って飲み下し、自分に言い聞かせるように囁いた。

便利な物に囲まれて、守られるのが当たり前の世界で生きてきた人間。その日常は突然壊され、たくさん転がっている死。別れ、悲しみ、苦しみ。もうこの世界は生温い日常ではない。

死が隣り合わせの非情な世界だ。

楸は強くなろうと決意した。まだ獣とは出会わないが、いつまでそれが続くのかわからない。だから、強くなる。

星矢は鼻をグズグズと鳴らして泣き止んだ。楸はティッシュで鼻をかませ、とけかけた氷でハンカチを濡らして眼に当てさせた。

その時、小鳩が飛び起きた。

「お父さん！お母さん！！」

彼女はそう叫んであたりを見渡す。今までの夢ではないか、その考えが脳裏をよぎるが、楸は容赦なく現実を叩きつけた。

「2人は庭に埋めたよ」

「そんな…嘘よ…」

「本当だよ」

「何でそんな嘔吐くの？」

「……嘘だと思いたければ思えば？」

信じる気など全くない小鳩に、楸は苛立ち混じりに言い捨てる。小鳩は彼女の言い方にキツと睨み付けた。

「何よその言い方！もっと優しい言い方できないの！？」

「生憎と、頭を使うのは苦手だね」

「だいたい！何で人の家の物を勝手に使ってるのよ！！泥棒！！！」

「……」

それはこちらの非だと謝る。一言断ればよかったのだ。素直に謝った彼女に、勢いが削がれるが、八つ当たりの様続ける。

「何でそんなに落ち着いてられるの！？人が死んでるのに！よくわからないことが起こってるのに！！だいたいおじさんとおばさんがどうなってるのかもわからな…」

最後まで、言えなかった。楸の表情が変わったからだ。何かを耐えるような、そんな表情。

「父さんと母さんは、死んだよ」

「え？」

「気づかなかった？ここに来る途中の交差点にバラバラ死体があったじゃん」

「まさか…」

「あれが、父さんと母さんだ。ちゃんと顔も見た。間違いないよ」

目が潤む。それが零れないように最大限の気を使って、彼女は口内に歯を立てる。

「なん、で…そんな素振り…見せなかったじゃない…」

「あそこで悲鳴あげて、泣いて喚いて。何か変わるわけないじゃん。覚悟してたしね」

声が喉につまって、咳をした。意識して呼吸を繰り返して、立ち上がる。

「ウチは1度家に戻るよ。準備できたら星矢と来て。なるべく動き

やすく実的なものをコンパクトにね」

そう言つて、楸は止める声もきかずに家を出た。自分の家の前まできて、しゃがみこむ。両手で顔を覆つて、嗚咽をもらした。

「つよ、く…ひつく…ならなきゃ…う…」

泣かないように、済むように

しばらく涙を流した楸は立ち上がり、袖で乱暴に涙を拭う。早く支度をしないと、と考えながら家に入り込んだ。

小鳩と星矢が家を訪れる頃には、楸はすっかり支度を終えて水を飲んで
いた。膝には白い犬を乗せて

「何、その犬」

「拾った」

「……ヒサちゃんがいいならいいけど」

怪我の治療をしてある。よく見ると楸の腕にも包帯を巻いてあるの

で一戦交えたようだ。星矢と小鳩はちゃんとソファーに座った。

「これからどうする？」

「…浜の方にいこつかなって」

「浜？何で？」

「2階つつつか、木を上ってみたんだけど向こうの方に行く程木々が薄くなってるから。今まで歩いてきたけど誰とも擦れ違わなかったし、どっかに避難してるんじゃないかなって」

「ああ…じゃああの動物にあわないのもそれを追ったから、とか？」

「そこまではわからないけど、ジツとしてるよりいいでしょ？…星矢？」

2人が話していると、星矢は犬を隅に寄せ、楸の膝の上に乗った。楸は首を傾げつつ、落ちそうな犬を支えた。

「とりあえず今日はここで一泊。明日早く起きて浜へ出発」

「わかった…私、お風呂入りたいんだけど」

「入ってこなかったの？冷たくていいならそのドア右だよ」

「セイ君も一緒に入ろうか」

「!？」

そう言って小鳩は星矢の腕を掴む。嫌々と首を振るのもかまわずに風呂場へと引きずり込んだ。

苦笑して見送った楸は、犬の体を膝に乗せ直してベルトを通す穴にひっかけてある折りたたみ式のナイフを取った。それを手の平に乗せ、ポツリと呟く。

「形見になっちゃったな……」

キャンプの時、専用のナイフを持つ父をみて自分も欲しいと言ったのだ。そうしたら中学に上がったらくれろと言ひ、この間お古を貰ったばかりなのだ。

「大切にするよ」

彼女は呟きながらそれを戻し、暗くなり始めた外を眺めた。

第3章 残酷な現実（後書き）

ノロノロと更新が続いています。結構シリアス要素が強めになりますが、私はアンハッピーは嫌いなので多分、そうはならない、筈？

第4章 生態の変化（前書き）

ほぞぼそと投稿する樹です。こんにちは

前書きは初めて書きます。ようやく4話目を投稿しました。こんな
初っ端から亀更新で読んでくれる方はいるのでしょうか・・・

不安に思いますが書き綴ります

第4章 生態の変化

今朝早くに小鳩に起こされ、支度した。

犬のことだが、名前はハクに決まった。白いからハク。単純とい
なかれ。

しかしこのハクはなかなかのじゃじゃ馬だった。楸以外が触れよう
ものなら噛み付くかひっかく。今は楸の荷物にくっついてる。

「あ、そうだ。星矢」

思い出したように楸が呼ぶと、顔を上げた。彼女はしゃがみ、ポケ

ツトからだしたそれを彼の首にかける。首にかけられたペンダントを見て、星矢は目を見開いた。

「おかあさんの、指輪…」

「大事にしなよ?」

楸は笑いながら言い、手をつないだ。小鳩は自分も、と反対と繋ぐ。

「じゃ、出発」

「おゝ!」

小鳩の声に楸が応えた。2人は意気揚々と歩き出し、手を引かれる星矢も嬉しそうに笑った。

ここから浜までそれなりに距離はある。足場もかなり悪いので、こ
ういった道に慣れていない星矢と小鳩の存在を考えれば半日でつく
だろう。楸は山を歩き慣れているので除外。
ではないが

一同はこまめに休憩を入れながら歩いた。

「凄いね、森みたい」

歩きながら小鳩は言った。ここが一日まで町だったなど信じられ
ないくらいに木々が密集している。まるで遺跡にいるようだ。しか
も見た事のなにも木の実まで成っている。

楸が味見しながら歩いているが、どれも毒はないようだ。

「そろそろ休憩しようか」

星矢が辛そうなのを見て、楸は足を止めた。近くに川があり、そこ
で水筒の中身を補充する。

「つめた〜い」

手を突っ込み、小鳩は気持ちよさげに言った。ハクもおいしそうに水を飲んでいる。

「…星矢？」

彼が泣きそうなのを耐えるような顔をしてしきりに足を気にしているのを見て、楸は首を傾げた。だが、思い当たることがあり、彼の前で跪く。

「痛い！！」

靴を脱がすと悲鳴が上がった。楸は赤くなった靴下に眉を寄せ、それを脱がす。

「うわ…酷い…」

小鳩が呟いた。靴擦れが出来ていてまめが出来て潰れている。さらに血が出ていた。星夜の年でこれを泣かずに耐えていたのを一種の尊敬の念を覚える。楸は溜息を吐き、手ですくった水を容赦なく足にかけた。

「~~~~~つ!!!!!!?」

星矢は痛みのあまり声にならない悲鳴をあげる。よほど沁みるのだろう、ボロボロと泣きながら楸に抱きつく。

「全く、痛いなら痛いって言え。こんなにさせて…」

文句を言いながら楸は抱きつく相手を小鳩に変えさせ、カーゼに傷薬を塗る。それを傷口にあてて包帯を巻いた。反対はこちら程酷くはなかったが、水をかけたら今度は声をあげて泣き出した。

「はい。終わり。耐えたのは凄かったけど今度かたちゃんと言っただぞ」

そう言って頭を撫でると星矢は泣きながら呟いた。

「強くなりたいのに…」

その言葉に楸は目を見開く。フツと笑みを浮かべて少年の頭をグシヤグシヤにした。

「弱みを隠すのが強さじゃないと思うけど？強くなる前に体壊しちゃいけないでしょ。怪我したり体調悪くしたらすぐに言うこと。いい？」

「…うん」

星矢が頷いたことに笑みを浮かべる。素直で大変よろしい。彼の靴と靴下をかばんに突っ込む。星矢の荷物を小鳩に渡した。

その時

「ヴ〜」

ハクが茂みに向かって唸りだした。どうしたのかと聞こうとした時、ガサリと茂みが揺れる。恐る恐る振り返ると、虎のような生き物がいた。

虎のような立派な体躯。しなる尾は2本。大きな口からのぞく牙をサーベルタイガーを彷彿させた。足には毛がなく、鱗が張り付いている。

「…木に登れ」

恐怖で震えそうになりながら、楸は振り絞るような声で言った。だ

が、小鳩は腰を抜かして動けない。楸はそれに気づき、気丈にも虎を睨み付ける。足が動かず、固まった手を無理やりあげ、思いつきり噛み付いた。犬歯が食い込み、血が流れる。鋭い痛みに呻きつつも、ようやく体を動くようになり、その間一切虎もどきから目をはなさなかった。

「星矢も…駄目か」

目に涙を浮かべながらへたり込んでいる。楸は虎もどきから目を離さないよう、刺激しないように荷物を捨て、木刀の紐を解く。

（あ…）

左手で木刀を支え、右手を添える。左足を半歩分下げた。中段の構えだ。木刀を構えた時、恐怖とは別の感情が湧き上がってきた。彼女はスウツと息を吸い込み、深く吐く。虎もどきは彼女を獲物と見なしたのだろうか、彼女が横に動くと虎もどきも横に動く。楸はさねげなく虎もどきとの間合いを計りながら小鳩達から離れた。緊迫した空気が漂い、どちらが仕掛けるのか、息が詰まる。

パキリと、踏んだ枝が音を立てた時、虎もどきは大口を開けて彼女に襲い掛かった。

「うおおー!!」

ゾロリと生えそろった牙と突然の攻撃に驚いた楸は木の根に足を取られてひっくり返った。この時はそれが功となり、虎もどきは彼女が居た空間を噛み砕いて通り過ぎる。楸は慌てて起き上がり、再び構えた。

（思ったよりも早くない）

着地点でグツと足に力を込め、虎もどきは方向転換すると再び彼女に襲い掛かった。楸はグツと敵を睨み付け、身を前かがみにする。そして勢いよく虎の喉を打った。

「くっ…おも…」

本当ならば打ち上げたかったのだが、腕が悲鳴をあげて出来なかった。

虎は悲鳴を上げて唸る。クルリと踵を返して逃げ出してしまった。喉への攻撃が嫌だったのだろう。

「ほっ」

楸は安堵の息を吐き、その場に座り込む。今になって手が震えだした。

「…どうしよう」

彼女は震える体を抱きしめて呟いた。汗がこめかみを伝い、その口元は緩やかな弧を描いていた――…

身のうちに湧き上がる高揚感。自分は動物を殴って喜んでいる。その事実には愕然とした。自分はこう言った動物虐待などは嫌いな筈だ

ったのに、トラが逃げたのを見た時喜んだのだ。

（でも、ハクを殴りたいとは思わない）

殴ったから喜んでいる。その考えを否定する為に胸中で呟いた。

この高揚感には覚えがあった。剣道の試合で、相手といい勝負ができていた時、相手を叩きのめした時のそれによく似ていた。

己の好戦的な一面を発見して、彼女は苦笑を浮かべた。

「わん！」

「ハク……」

吼えるのを聞き、彼女は振り向いた。ハクが飛び出してき、彼女に

肩に飛び乗る。氣遣うように頬を舐められ、楸はその頭を撫でた。

「ヒサちゃん！」

「姉ちゃん!!」

ハクの後にくるように小鳩と彼女に背負われた星矢が来た。足が傷だらけなのは転んだからだろう。小鳩は星矢をおろして楸に詰め寄る。

「怪我は!?!とこも痛くない!?! あのとらはい!?!」

「ちょ、ちよつと落ち着け」

「あ!腕が切れてる!!」

どうやらトラに引つかかれたらしい。パツクリと開いた傷口から血が流れていた。意識した途端痛みが走って小さく呻く。小鳩は流れる血に頭を押さえてフラリとよるめき、がしっとその腕を掴んだ。

「セイ君！救急箱！！」

「はい！」

座っていたセイは楸のバツクから出して渡す。器用な小鳩はあつという間に治療を終えた。楸は礼を言って脱いだ上着を腕に引っ掛ける。

「お気に入りだったのに……」

ボソリと呟いてから川で軽く血を洗い流した。それを荷物に引っ掛けて立ち上がる。

「よし、行くか」

「あ、ヒサちゃん！」

「ん？」

バックを拾い、星矢を背負った楸は振り返った。小鳩は俯き加減に言う。

「助けてくれて、ありがとう」

「どういたしまして」

きよとした楸はニコリと笑って返した。

一同はこの後、特に何の弊害を受けずに足を進めた。日がおちてきた頃にはようやく森を抜ける。

「外は普通だね」

住宅は全滅していたが、森の外には堤防がちゃんとあった。彼女らは堤防をあがると、浜に転がる集団に目を見開く。

「人がいる！」

「…１０人くらい？」

制服を着ているのを見ると、同じ中学だろう。チラホラ顔見知りがいる。全員男子で、砂浜に倒れこむ者、膝を抱える者がいた。２人は堤防を下り、彼らに駆け寄る。

「おおーい！」

小鳩が声をかけると、幾人が顔を上げた。近くにいた者は小鳩の服を掴んだ。

「わっ！」

「食い物！食べ物もってないか！？」

どうやら元気がないのは空腹からのようだ。わらわらと集まってきたので仕方なく食料を分けると勢いよくかきこみ始めた。

「…ねえ、なんでみんなあんなに餓えてたの？」

1人に小鳩が聞くと、暗い表情で話してくれた。

何でも堤防を越えようとするや獣が徘徊しているのが見え、川や海の魚も凶暴だとか。水汲みは何とかなったが捕まえて食べるなどどうしてもできないとそうだ。

この話を聞いた女子2人は

（ヘタレだな）

と思ったとかないとか。

「あわよくばその犬を…」

ハクを見て物騒なことを言い出したので楸が無言で殴った。

「とりあえずは寝るか。星矢がお寝むだ」

コックリコックリと舟を漕ぎだした星矢を抱き上げて楸は言った。
それから、と付け足して木刀を男子達に向ける。

「コバちゃんに手え出したら再起不能ね」

何が、とは言わない。邪なことを考えていた男子達は顔を真っ青にして何度も頷いた。彼女はその反応に満足して小鳩を連れだって寝床を探しに行った。

「コバちゃん」

「なに？」

「明日、ウチは食料を探しに森に入るから水辺の搜索お願い」

「わかった」

楸が単独で森に入るのは歓迎できないが、自分が足手まといなのは昼頃の一件で自覚したので素直に頷いた。自分に出来ることをこうして教えてくれるだけで嬉しい。

「星矢とハクのことお願いね」

「うん」

「後は、なるべく男子と接触持たない方がいいよ。狼の中に羊が1匹って危ないから」

「…うん」

人間は追い詰められたりいざとなったりした時にどんな行動をするのかわからない。今は法律もまともに機能しない。女である時点で危険があることはわかっていた小鳩は不安げに、素直に頷く。楸は安心させるように微笑んだ。

「数日には戻るからちゃんと隠れてるんだよ?」

「わかった」

「ハクも、コバちゃんと星矢をお願いね」

「わん！」

ハクはなかなか賢い犬だ。放せば通じるし、行動もこちらの迷惑にならないようにしてくれる。

楸はこれからのことを思って木刀を握りしめた・

第4章 生態の変化（後書き）

面白いと思ったら感想ください（土下座）

δ 第5章 朝日の決意

楸は日がある程度上った時に目を覚ました。小鳩達に見送られ、森の入り口に立つ。獣のうなり声を聞き、恐怖で跳ね上がる心臓を押さえつけて呼吸を整えた。

「やってやる」

生きる為に。

この数日の間、楸は森を駆けずり回り、小鳩は決して寢床がばれないように適度に男子と交流した。何かとチャホヤしたがる男子を軽く交わし、2人つきりには決してならない。必ず星也とハクを連れて歩いた。

彼女は視線には敏感な方だ。だから嫌な目で見てくる男子にはあまり近寄らず、情報収集に徹した。それでもやはり無理に近づいてくる男子がいて、迫ろうものならばハクに噛み付かれる。

ある程度散策を終えた後の彼女の日課は釣りだ。確かに魚は凶暴だが、釣り上げた物を星也が木の棒で叩き落としてたりハクが噛み付いてくれたりするので怪我はない。コツさえ掴めば何の苦もなかった。釣竿は海岸に落ちていたゴミや流木の類を活用した。

「魚もいいけど、そろそろ肉が食いたい」

誰かがそう愚痴をこぼした次の日だ。

「ワン！」

薪を集めている時、不意にハクが吼えて駆け出した。それに小鳩は驚いて後を追う。

「ハク！待って！！」

星也の手を引いて追いかける。すると、浜辺で男子達が騒いでいた。

その人垣の向こうには

「ヒサちゃん！」

飛びついてきたハクの頭をなでている楸の姿があった。彼女は小鳩に振り返り、笑う。

「ただいま」

「お帰り！」

「お帰りなさい」

小鳩と星矢は彼女に抱きついて迎えた。

無事帰還したことにひとしきり喜んだ後、小鳩は首をかしげる。

「その棒なあに？」

「槍。先端をナイフで削ったんだ。木刀が割れちゃってね」

「怪我は？」

「目だったのは塞がった。たいした怪我はないよ」

「…靴は？」

今気づいたのだが、楸は足に布を巻き、藁を編んだようなサンダルを履いている。前後の紐を持ってきてしっかり結んでいるので足にちゃんと密着していた。

「壊れたからそこらへんの草を編んで作った」

結構丈夫だよ、と笑いながら言うものだから小嶋も思わず苦笑した。

「…この虎は？」

なるべく見ないようにしていたのだが、大きな虎が横たわっていた。楸は得意気になることもなく、当然、といった調子で答える。

「ウチが狩った」

呆然。かなりたくましくなった楸さん。この後は焼肉パーティーとなった。

δ

δ 第5章 朝日の決意（後書き）

- ・ 細々と更新。書きだめしているのですが、なかなか打つ暇がない・

面白いと思われましたら感想お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8724q/>

永久の命

2011年12月13日13時45分発行